

赤 嶺(せきれい)

育成者：三沢 昭(山梨県山梨市)

来

歴：「甲斐路」の枝変わり

特 性

■栽培特性

「甲斐路」の早熟着色系枝変わり品種で、「甲斐路」より20日程早熟で9月上～中旬に収穫となる。栽培特性は「甲斐路」とほとんど同じで、樹勢は旺盛で樹の拡がりも大である。

この品種の栽培に当たっては特に結実、着色、病害防除がポイントになる。結実を良くするための花穂の整形は、花が1～2輪咲き始めた頃、副穂と上段の跳ね上がっている支梗を切除し、残った支梗で横に長いものは刈り込む。22～23段の残し房尻を切り詰める。樹勢が強い場合はこの作業は少し遅らせ、満開時に行うと良い。摘粒は縮果症の発生があるので2回くらいに分けて行う。1回目は落花後20～25日に行い55～60粒残す。2回目は除袋後に最終的な仕上げ摘粒をして45～50粒とする。摘粒後速やかに袋掛けを行う。「甲斐路」に比べ着色は容易であるが、袋の中が高温になると着色障害を受けやすいので茶色等の有色袋を使うと良い。除袋の時期は8月中旬であるが、早すぎる除袋は着色が進みすぎる傾向があるので、十分糖度がのってから除袋を行うようにする。除袋後は速やかに透明傘をかけ、果房に陽が当たるように管理する。また、本品種は縮果症の発生がみられる。防除対策は確立していないが、樹勢の強い樹に発生が多いことから、樹勢を落ち着かせ、適正な樹相に保つことが必要である。10a当たりの目標収量は1,800kg、平均果房重を500gとすると10a当たり3,600房程度の着房数となる。

■果実特性

果房は整形により円筒または円錐形となり、大房で500gくらいになる。果粒は卵形で大きく、約10g程度になる。果皮は厚く強い。果粉の量は中位、果肉は崩解性でやや軟。果皮と果肉の分離は困難である。着色は「甲斐路」より容易で濃い鮮紅色となる。糖度は高く19～21度になる。裂果性、脱粒性はほとんどなく、輸送性、貯蔵性に富む。

■病虫害抵抗性および栽培上の留意点

本品種は欧州種であるためべと病、うどんこ病、灰色かび病等に弱く、徹底した予防散布を心がける必要がある。また収穫期に入ると晚腐病、灰色かび病、黒かび病等により果実の腐敗が例年問題となる。薬剤散布と併せて耕種的防除が不可欠となる。例えば灰色かび病は落花後の花カス落しの徹底で軽減され、黒かび病は果皮に傷があると侵入するので、ハチ類、ショウジョウバエ等の被害回避、風雨による損傷を防ぐ等果実表面に傷口を作らないようにすることが大切である。

■地域適応性

着色の容易さ、早熟性から「甲斐路」より広い地域で栽培が可能である。しかし年により高温による着色障害が発生することがある。また耐寒性が弱く、冬期の低温により凍害の発生があるので注意を要する。排水良好な土壌条件を好む。

(桜井 健雄)